

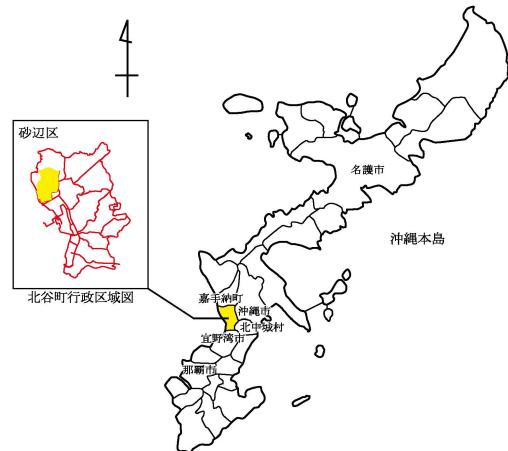
クマヤ一洞穴遺跡 (クマヤーガマ)

北谷町教育委員会

■北谷町の位置

北谷町は、沖縄本島中部の西海岸沿いの人口約 28,926 人（2020 年 1 月現在）で県都那覇から約 16 km に位置しています。

北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接しています。現在、町の面積は 13.93 km²、町域の 52.9% は米軍基地となっています。



■砂辺の概要

クマヤー洞穴遺跡（クマヤーガマ）が所在する砂辺（方言：すなべ シナビ）は本町の北西部に位置しています。1600 年代中頃には「すなへ（砂辺）」として存在が確認できる本町の中でも古い集落のひとつです。

現行行政区の「砂辺区」は人口は 2,859 人、世帯数は 1,253 世帯（2020 年 1 月現在）です。戦前の行政区画では、「砂辺」と「砂辺又前」をあわせて「字砂辺」とっていました。

現在、区面積の約 67% が在沖米軍基地の軍用地となっています。1945 年 4 月 1 日の連合軍（米軍など）による沖縄上陸後に始まる基地整備や土地接収によって、戦前の砂辺の風景は失われました。1955 年（昭和 30）12 月 17 日に米軍政府下の琉球民政府のもとで、戦後の北谷村砂辺区が設置されています。



砂辺区：住宅地東側には広大な米軍嘉手納飛行場



1986年（昭和61）埋没していたガマ（第5洞穴）



1986年の調査：第1洞穴

■遺跡の発見と発掘調査

クマヤーガマは、住民の集団避難壕として連合軍による沖縄上陸が始まる直前まで利用されました。戦前の「字砂辺」は基地整備により地形や風景が変わり、埋没した洞穴の上や周辺には外人住宅が建設されていました。

1986 年（昭和 61）6 月、戦時に砂辺の住民が避難し助かったクマヤーガマは砂辺の方々による整備が行われました。戦後の北谷村砂辺区が設置されてから 32 年後、米軍上陸から 41 年後のことです。

埋没していたクマヤーガマ（洞穴）を整備するために埋土掘削作業が行われた際、多数の土器とともに先史時代の人骨が出土し遺跡が発見・確認され、1986 年から 1988 年（昭和 63）にかけて発掘調査が行われました。

調査の様子



1986年（昭和61）照明灯を使い、土をベルトコンベアで運んだ調査。



1987年（昭和62）階段の一部が整備された。



1987年（昭和62）第5洞穴の調査風景。



第1洞穴の入口



階段の奥に第1洞穴の入口がある。

洞穴（ガマ）の整備

埋没していた洞穴には、周囲の住宅からの排水が流れ込んでおり、整備工事の際に高圧の水流で壁を洗い洞床に枝サンゴを敷き、洞穴に降りる階段や通路、照明灯などが整備されました。その際、米軍が洞穴を利用したときに設置した電線用の碍子（がいし）も大事な歴史として残されています。

現在、洞穴内には「観音堂」、「子宮神（りゅうぐうしん）」と記された石碑と小さな鳥居が建立され、平成7年には洞穴上に発掘調査で出土した縄文時代の人骨を納めた納骨拝殿が整備されています。



クマヤーガマ入口整備1986年（昭和61）



現在のクマヤーガマ入口と納骨拝殿2017年（平成28）



拝所「ティラ」1986年（昭和61）



整備前のティラガマ入口



現在のティラガマ入口2017年（平成28）

クマヤー洞穴遺跡(クマヤーガマ)

本遺跡は、海岸近くの標高約7mの石灰岩段丘に形成された鍾乳洞に位置しています。町域の北側一帯に見られるカルスト地形（石灰岩の侵食が進み尖った残丘などが見られる地形）の西端にあたります。

洞穴入口は、鍾乳洞の天井部分が陥没してできるドリーネと呼ばれる大きな縦穴となっており、全長は約60m、入口の縦穴部分から3つの連続する鍾乳洞（第1～3洞穴）が北西方向へ延びています。整備された階段を下りると入口がある第1洞穴からの奥行きは約40mです。

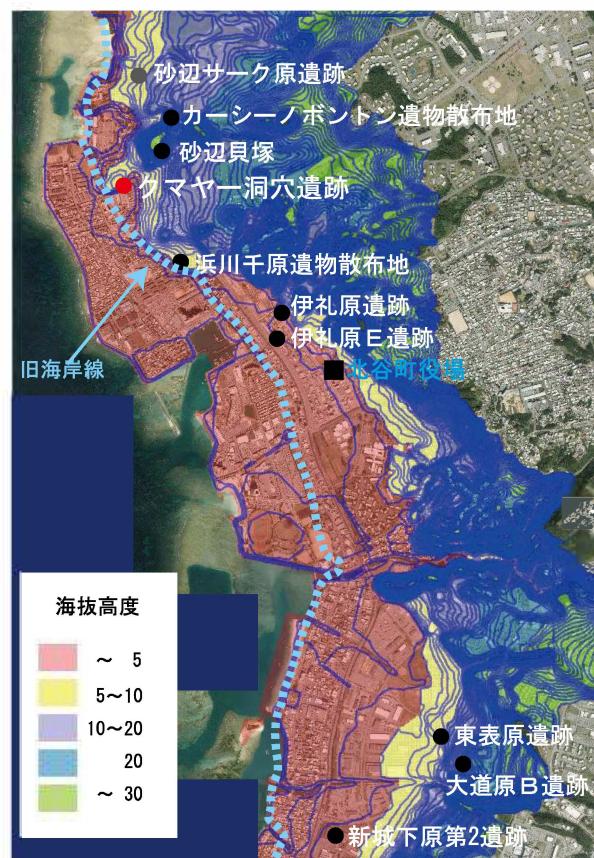
洞穴で発見された人間活動の痕跡は5時期に分けられます。1期目は約5000年前〔貝塚時代前II期（縄文時代前期に相当）〕、2期目は約3500から3000年前〔貝塚時代前IV期（縄文時代後期に相当）〕、3期目が約2500年前〔貝塚時代前V期（縄文時代晩期に相当）〕、4期目は約800～600年前の沖縄でグスク時代と呼ばれる頃の祭祀場所、5期目の近世は岩陰墓として利用されています。このうちの3期目の約2500年前は、洞穴は墓域として最も利用されています。さらに、太平洋戦争の沖縄戦では集団避難壕となつた戦争遺跡でもあります。

戦時に集団避難壕として利用する際に、クマヤーガマはティラガマとの間にあつた小さな穴（イヌが通れる程度の大きさ）を広げています。洞穴内の空間は1番、2番、3番ガマと分けて呼ばれました。

*沖縄方言で洞穴は「ガマ」・「ティラ」などの呼称があります。

■ 地形と周辺の遺跡

本遺跡を標高差で分けた地形図でみると、遺跡が立地する石灰岩段丘は、約6000年前の「縄文海進」と呼ばれる時期には現在より海面が2～3m程度上昇しており、海に突き出た地形であったと考えられます。町内の縄文時代に相当する時期の遺跡は現在のところ10カ所確認されています。



ティラガマ入口と拝所

ティラガマ

クマヤー洞穴の西側に隣接し、入口の背後（南側）に「砂辺之寺」の碑が建立されている拝所「ティラ」があります。「寺」があつたと言われています。



第1洞穴（1番ガマ）

大きな鍾乳石奥が入口です。面積は約74m²、天井の高さ約3.5m。中央付近に、発掘調査終了翌日に陥没した穴は石積を円形に整備しています。



第2洞穴（2番ガマ）

1・3番ガマより洞床の標高が高く面積は約40m²、天井の高さは約3.5m。西側には鳥居と石碑「観音堂」が建立されています。鳥居奥には「天井を支える手の様だ」と言われる鍾乳石があります。



第3洞穴（3番ガマ）

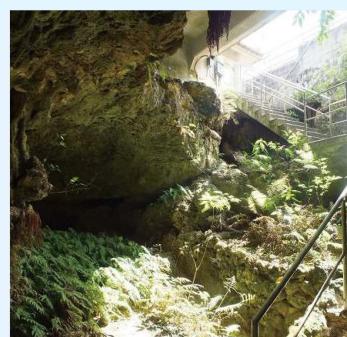
最も広い空間で、面積は約82m²、天井高は約3.9m。東側の窪みの中には、水位が変化する湧水があります。

3番ガマ奥の小洞穴入口には、鳥居と石碑「子宫神（りゅうぐうしん）」が建立されています。ここを拝んだ方が、子宝に恵まれたことが名称の由来と言われています。



第4洞穴

階段が整備された縦穴開口部の洞床中央部となる岩盤の高まり南側に細長く延びる洞穴です。



第5洞穴

大きく開口した洞穴縦穴の東側岩陰部分。面積は約47m²。天井の高さ約4.5m。

北側奥では1番ガマとつながっています。

約5000年前（縄文時代前期に相当）・約3500～3000年前（縄文時代後期に相当）

①約5000年前〔貝塚時代前II期（縄文時代前期に相当）〕、②約3500～3000年前〔貝塚時代前IV期（縄文時代後期に相当）〕に利用された痕跡が見られるのは、第1洞穴の入口付近と第5洞穴の一部です。異なるのは②約3500～3000年前は、やや薄暗い第2洞穴入口付近にも痕跡が見られます。この範囲は太陽の光がとどく範囲であることから、その限られた範囲を利用していたと考えられています。

出土した土器は、室川下層式土器、伊波式・荻堂式・大山式土器があり、壊れた状態がそのまま残つてると見られるものや、鍾乳石に立て掛けのような状態で石灰分に覆われていたものなどが出土しています。

洞穴内の痕跡から、台風など災害時の避難場所のような短期間の利用ではないかと考えられています。



土器の出土状況



第1洞穴入口



第5洞穴（北側）から見上げた洞穴縦穴

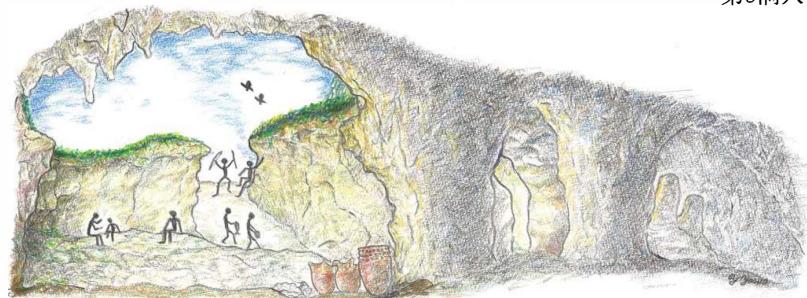


第5洞穴（南側）から見上げた洞穴縦穴



約5000年前の痕跡

約3500～3000年前の痕跡



洞穴利用の想像図



洞穴（縦穴）入口と考えられる場所
(幅約1.3m)

約 2500 年前（縄文時代晚期に相当）

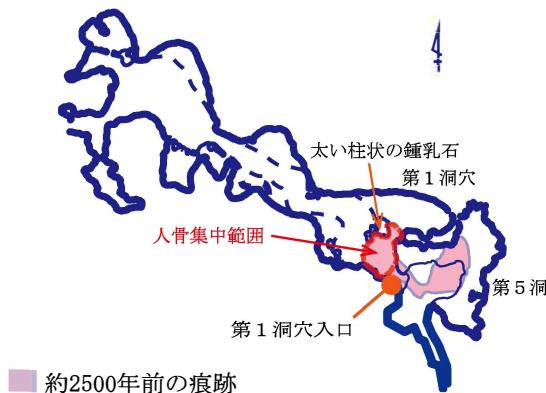
約 2500 年前〔貝塚時代前 V 期（縄文時代晚期に相当）〕の頃は、洞穴を墓域として最も利用していたと考えられ、第 1 洞穴の入口近く、洞穴の天井から洞床につながる柱状の鍾乳石を背にするように $3\text{ m} \times 3\text{ m}$ ほどの狭い範囲に人骨が集中して発見されました。

鍾乳洞内の石灰質に厚く覆われ取り出すことが困難なものもありました。形質人類学の専門家による鑑定・分析では 50 体以上が確認されています。

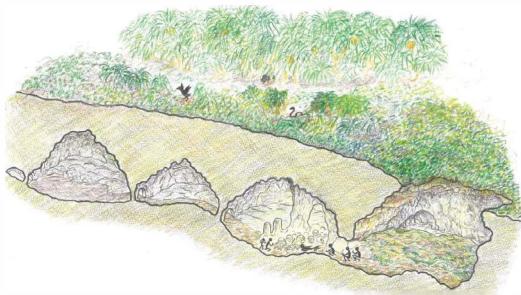
人骨が集中する範囲では、集骨されている様子があり、新しい死者がでると古い骨を整理しなおす「改葬」が行われたと見られ、頭蓋骨を北側にし、四肢骨は南側（入口側）に集骨する傾向があることから、新しい死者を葬る空間を作る行為と考えられています。

人骨に見られる特徴は、身長が男性は約 160 cm（2 号）、女性は約 148 cm（1 号）、頭の形を上から見ると短頭、顔の形は高さや幅が低・広顔で縄文人の特徴を持つています。また、人為的に下顎切歯を中心に歯牙を除去する抜歯が行われており、犬歯を抜去しない沖縄諸島の特徴を示す下顎が 9 例が確認されています。

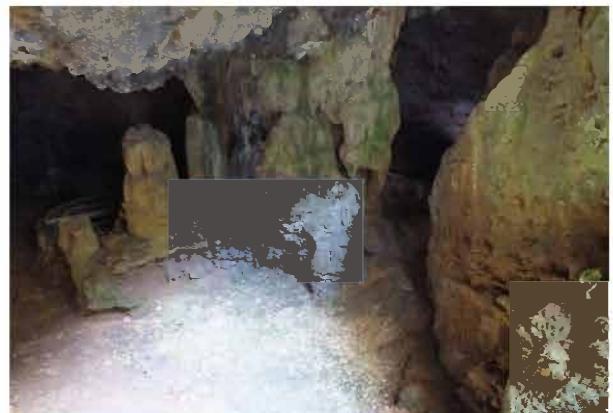
人骨の副葬品には、貝製腕輪、垂飾品、ヒスイ製管玉、土器（カヤウチバンタ式・宇佐浜式・喜念 I 式土器や頸部に突起を持つ磨研土器の影響を受けたもの）が出土しています。



約2500年前の痕跡



約2500年前の想像図（断面見通し図）



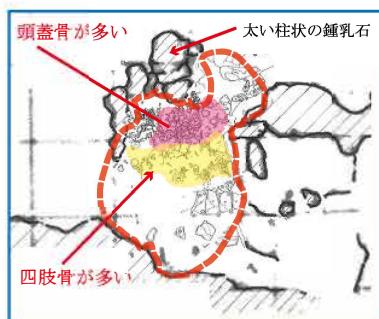
人骨集中範囲には、現在、枝サンゴが敷かれている。



頭蓋骨は写真左奥側、四肢骨は手前側



人骨に伴う土器破片の出土状況



人骨の集中範囲（平面図）

第 1 洞穴内の太い柱状鍾乳石の前面に人骨が集骨されていた。



頭蓋骨の集骨状況



大腿骨や下顎骨の出土状況



第1洞穴内から見た入口

祭祀場所となったクマヤ一洞穴

14世紀後半～15世紀頃の中国産青磁、白磁、天目茶碗などが出土し、これらの品々はかなり良質な品物であることから、特定の人と関わる祭祀場所として利用されたと考えられています。

洞穴（縦穴）入口と考えられている場所から第1洞穴入口にかけて、洞壁内の南側壁に沿って石敷が発見されており通路と考えられています。遺物は、第1洞穴入口の東側や同洞穴内の太い柱状の鍾乳石周辺から出土し、刀子、ガラス玉、鉄製の鏃（やじり）などのほか、さらに、太い柱状の鍾乳石の北側からシャコガイ製の貝錘（かいすい）が35個まとめて出土しています。



石敷の通路跡



青磁（盤）



白磁（碗）



天目茶碗

■ グスク時代の痕跡

クマヤーガマ(平面図)

グスク時代

沖縄の考古学でいうグスク時代〔開始期は諸説あるが、おおよそ10・11世紀頃、終わりについて定説はないが15・16世紀頃まで（17世紀前半までの提案もある）〕は、これまでの狩猟・漁労・採集社会から農耕社会へと変化し、各地に按司（あじ）が登場し階級社会へと変化した時代です。琉球王国成立に登場する王統で見ると、1187年の舜天即位から、英祖、察度の後、尚巴志が中山王となり、山北、山南を倒し三山が統一され琉球王国（第一尚氏王統）が成立し、15世紀後半の第二尚氏王統（尚円）が始まります。

グスク時代の北谷

グスク時代初期の沖積低地に立地する小堀原遺跡から、県内最古（920～1030年前）の穀物（大麦、稻、アワ）が発見され、隣接する後兼久原遺跡（11世紀後半～16世紀）では、建物跡や鍛冶を行っていた集落であることを示す様々な遺物が出土しています。

グスク時代の北谷を見ると、3人の按司による興亡の伝承があります。北谷城が最も栄えていたのは14・15世紀頃と考えられ、県内の城跡の中でも規模が大きく、殿舎跡、城壁の下部、城門の一部、城門への階段などが確認されています。

沖積地に立地する平安山原B遺跡や丘陵谷間に立地する伊礼伊森原遺跡では、耕作地の区画と考えられる石列が発見されています。



鉄製風呂鍔の刃（平安山原B遺跡）



掘立柱建物跡と高床式建物跡（後兼久原遺跡）



14～15世紀頃の北谷城（想像図：中村恵氏作画に加筆）

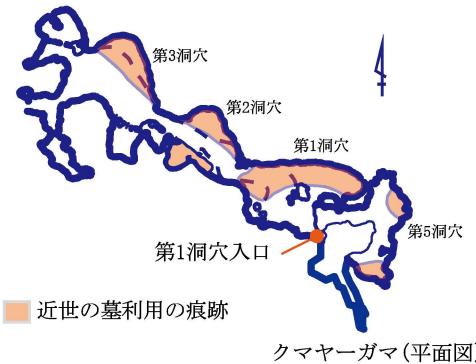


丘陵谷間の土留め石積（伊礼伊森原遺跡）

靈域、墓として利用されたクマヤー洞穴

近世におけるクマヤー洞穴は、祝女（ノロ）が管理する場所、靈域として利用されたと言われています。さらに、墓として利用された痕跡が、第1・3洞穴北側、第2・5洞穴南・北側に見られ、蔵骨器に転用した褐釉陶器などが出土しています。

墓としての利用は、戦後、米軍の立ち退き命令によって移転するまで続きました。



褐釉陶器（壺）



蔵骨器（厨子甕）



白磁（香炉）



蔵骨器の蓋（裏面に銘書）

近世（近世琉球）

近世琉球は、1609年の薩摩藩（島津氏）による琉球侵攻から1879年の明治政府により沖縄県となるまでの270年間（17～19世紀後半）となります。琉球は、朝貢国として中国（明・清朝）との外交関係を維持しながら江戸幕府の支配下にあり、政治体制や社会・経済が大きく変化していきます。

王統で見ると第二尚氏王統の第7代目の尚寧王から、廃藩置県により藩王となった最後の琉球国王の尚泰王（第二尚氏王統の第19代目）までとなります。

近世の北谷

17世紀頃の北谷間切では、村の再編成や分割・新設が行われ「絵図郷村帳」（1640年代）に見える9カ村（安仁屋、北谷、桑江、平安山、砂辺、野国、屋良、嘉手納、山内）のうち、安仁屋は宜野湾間切、山内は越来間切となり野里・玉代勢・伊礼・浜川・伝道など5カ村が新設され、合わせて12の村が成立しました。

18世紀には首里・那覇などから田舎に下り、農業に従事する士族層による「屋取（ヤードワイ）」と呼ばれる集落が形成されます。

19世紀には、間切の街道（宿道）が通る白比川の池城橋が木製から石橋に改修（1820年）され、1840年には字北谷沖の岩礁で英國船籍の東インド会社所有の輸送船インディアン・オーク号座礁事件が起きています。

近世末期の米、サツマイモ、麦、藍、さとうきび等を生産する純朴な農村の姿は、近代まで踏襲され、王府が関与して行われた祭祀も北谷・平安山ノロに継承され、北谷ノロは北谷・伝道・玉代勢、平安山ノロは平安山・桑江・伊礼・浜川・砂辺を管轄していました。



インディアン・オーク号の漂着
(想像図：中村原氏作画に加筆。)



祭祀を行う北谷ノロ（1998年）

集団避難壕に使われたクマヤーガマ（洞穴）

■ ガマへの避難



1番ガマの入口



1番ガマ入口付近の洞穴内部



ティラガマとの境を広げた場所



3番ガマ（左側の窟みの中に湧水がある。）

1944年（昭和19）10月10日の「十・十空襲」（註1）を村はずれの小高い丘や馬場で見ていた住民が、敵飛行機から機銃掃射や爆弾による攻撃をうけたことで、身近に迫った戦争を実感し、約300名がクマヤーガマへ避難しました。

人が1人出入りできるほどの大きさの洞穴入口は大人が見張り、その近くにススキの葉で囲んだ大小便用の桶が置かれていたそうです。暗い洞穴内では、皿に入れた豚の脂や松脂を燃料にして灯をともしました。その灯りが外に漏れないように洞穴入口を麻袋（方言の呼称：カマス）で塞いでいたそうです。

ガマの中は換気が悪く湿度が高かったため、3番ガマに小さな空気孔を6つ開け、隣のティラガマに通じる狭い穴を広げて2つのガマを繋ぎ、使える場所はすべて寝床に利用されました。3番ガマの奥にある湧水でお茶を沸かしたり炊事をしていたそうです。

註1) 南西諸島全域に行われたアメリカ軍による空襲。那覇市の大半が消失した。



3番ガマ天井の空気孔

■米軍上陸直前の緊迫と避難

沖縄本島上陸のため連合軍が慶良間諸島に上陸した翌日の1945年（昭和20）3月27日、正午か午後1時頃、2人の日本兵から避難命令を受けた時には、住民は米軍が上陸してくると思っていなかったそうです。午後7時か8時頃、7・8名の日本兵から早く避難するように追い立てられた、ガマの中は混乱状態になり、泣き出す人、祖父母に「死に装束」の着物を着せ、抱きしめて泣き叫ぶ家族や足腰の弱いお年寄りをガマに残さざるをえない状況となり、本島北部などへの避難が始まりました。しかし、ガマの中で戦死した人は一人も出ませんでした。

村民の避難先として指定されていた羽地（現在の名護市）に向か、本島東海岸側から逃げる人、本島南部に逃げる人、早い段階で保護され砂辺収容所に入った人など生死が分かれました。



砂辺のナガバーマに上陸する米軍



米軍上陸・進行と避難経路 ※『北谷町の戦跡・記念碑』抜粋・加筆



戦前のクマヤーガマ周辺 ※『北谷町の地名』より抜粋・加筆



米軍上陸地の現在の景観（上陸地となった砂辺・嘉手納・読谷を望む）



砂辺ナガバーマ周辺（干潮時の風景）

クマヤ一洞穴遺跡の出土遺物



北 谷	沖 縄	日 本
・リュウキュウジカが生息する。（鹿化石出土地：字吉原）		3万年前 2万年前 1万5千年前
・南島爪形文式土器が使われる。（伊礼原遺跡：ヤブチ式、伊礼原E：東原式） ・曾畠式土器が使われる。（伊礼原遺跡） ・室川下層式土器が使われる。（伊礼原遺跡） ・リュウキュウチクで編んだ笊（ザル）が使われ、ドングリ（オキナワウラジロガシ）のアケ抜きをする。（伊礼原遺跡） ・ショウナンボクで作られた木製容器が使われる。（伊礼原遺跡）	縄文時代相当（貝塚時代前期）	旧石器時代 ・港川人
・伊波式土器が使われる。（砂辺貝塚） ・竪穴住居が作られる。（伊礼原遺跡） ・大山式土器が使われる。（クマヤー洞穴遺跡） ・宇佐浜式土器が使われる。（クマヤー洞穴遺跡・砂辺サーク原遺跡）		1万年前 7千年前 5千年前
・クマヤー洞穴が墓域として利用され、改葬・副葬品・抜歯が見られる。（クマヤー洞穴遺跡） ・竪穴住居が作られる。（砂辺貝塚） ■木（ヤエヤマコクタン）製飾が作られる。（伊礼原遺跡） ・入来式土器が使われる。（平安山原B遺跡）		4千年前
・フェンサ下層式土器が使われる。（浜川ウガン遺跡、平安山日遺跡）		2千9百年前
・大麦、小麦、稻が出土しており栽培の可能性がある。九州産の滑石製石鍋が使われる。（小堀原遺跡） ・米・麦などの栽培農耕が本格化する。掘立柱住居・高床式倉庫が作られる。（後兼久原柱遺跡）		弥生時代
・北谷グスク（城）が築かれる。 ・クマヤー洞穴が祭祀場所として利用される。（クマヤー洞穴遺跡） ・島津軍の琉球侵攻、伝承では首里城が占拠されたことを聞き、佐敷興道（北谷城に配置された守備隊長）が自害。	グスク時代	古墳時代
・北谷間切、佐阿天橋、池城橋、城橋の石普請が行われる。 ・インディアン・オーク号が北谷沖で座礁。		飛鳥時代
・県内初の「北谷トンネル」開通。 ・「北谷間切」を「北谷村」に改称。		奈良時代
・クマヤーガマが集団避難壕として利用される。（クマヤー洞穴遺跡）	琉球王国時代	平安時代
		10世紀 11世紀 12世紀
		13世紀 14世紀
		15世紀 16世紀 17世紀
		室町時代 戦国時代
		安土・桃山時代
		18世紀 江戸時代
		19世紀
		明治時代
		大正時代
		昭和

※年表は『北谷町史 第1巻 附録』北谷町教育委員会 2005年、『沖縄県史』図説編 前近代 2019年、

『グスク・ぐすく・城』沖縄県立博物館・美術館 2019年、『サキタリ洞穴遺跡の発掘』沖縄県立博物館・美術館を参考に作成した。

■クマヤー洞穴遺跡(クマヤーガマ)の重要性

いくつもの歴史の痕跡が重なるクマヤーガマは、砂辺の守り神とも言われており現在も旧字砂辺戸主会（現砂辺郷友会）のムラシーミー（村清明）の際に拝みが行われ、大切に受け継がれています。

本洞穴で約2500年前（縄文時代晚期相当）に墓域に利用され、約9m²の狭い範囲に密集した人骨にみられる葬り方は、沖縄諸島の葬制（風葬や改葬）などの源流を考えるうえで重要です。

さらに、近年、クマヤー洞穴遺跡から出土した土器の中に9千年前の押引文土器よりも古いと考えられている波状文土器の類例資料があることが判明しました。伊礼原遺跡で出土した約7000年前の爪形文土器より古く、本町における最も古い土器となる可能性があり注目されています。

■文化財の保存活用

クマヤーガマは、旧字砂辺戸主会（現砂辺郷友会）による整備工事の際に遺跡であることが発見・確認され、町教育委員会による発掘調査、その後の同戸主会による整備、納骨拝殿の建設費の一部は町の補助金が充てられました。

本洞穴では、広島・長崎派遣事業の事前平和学習をはじめ各種講座や研修の際に、本町の歴史や文化を学び平和を語り継ぐ場として公開・活用されています。

北谷町遺跡一覧

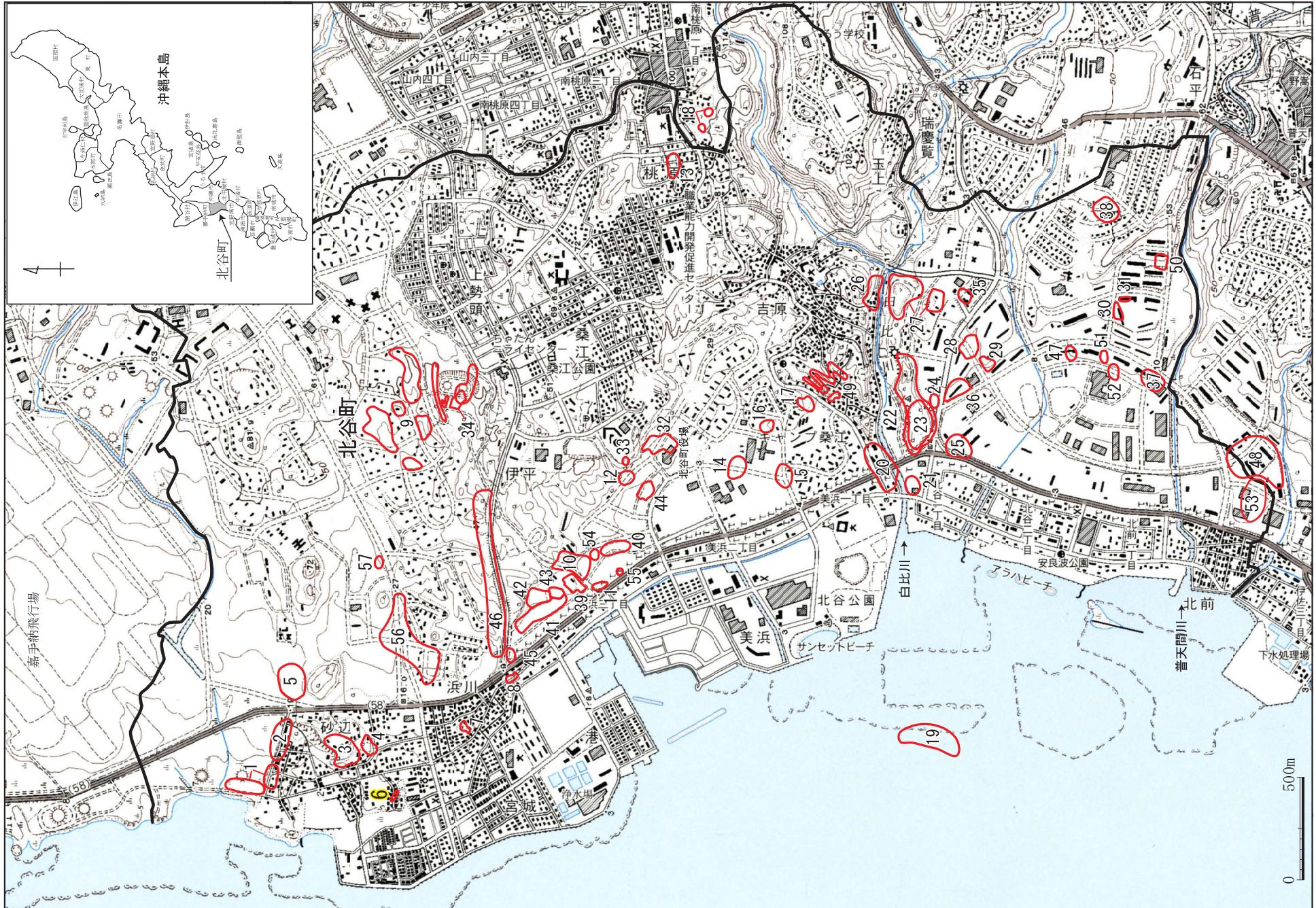
2020年1月現在

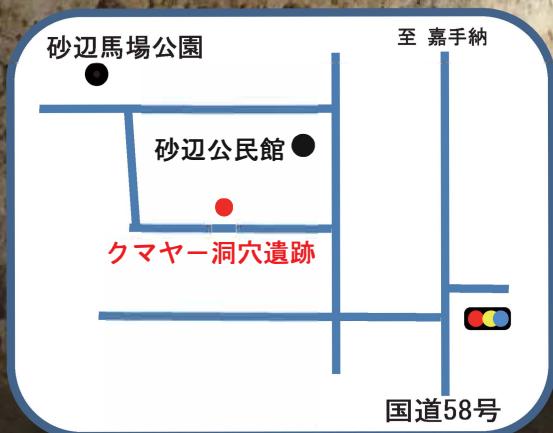
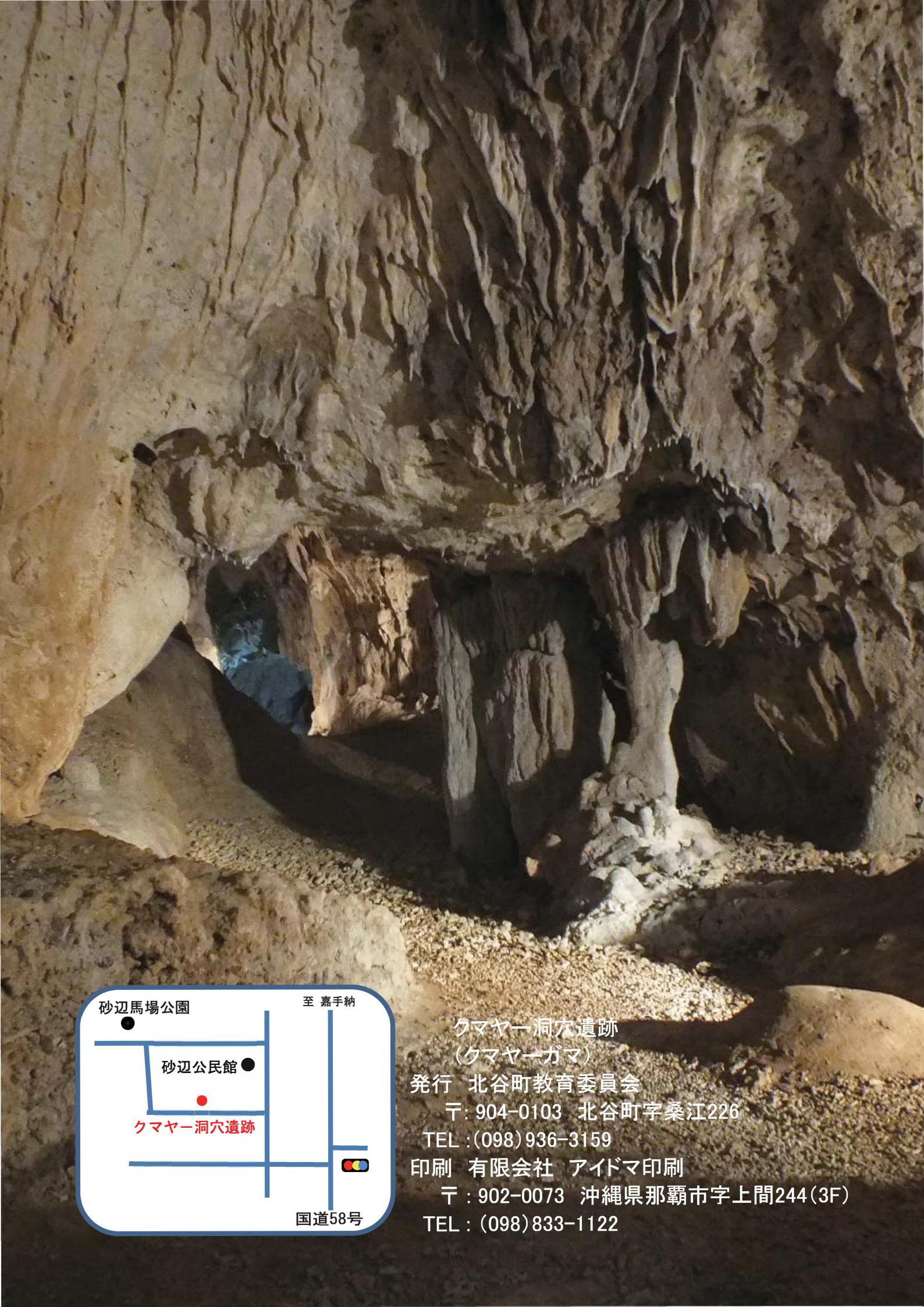
No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚後期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前IV期～近世	砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前IV期～グスク	砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	貝塚前V期	砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前II期～戦前	砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	貝塚前V期	浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しも せどくこぼぐん)	近世	上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	貝塚前I期～戦前	伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・晚期・近世・戦前	伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(く わえのとうん)遺物散布地	グスク～近世	桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる)古墓	近世	桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	中世	吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	北谷地先
20	池(いのち)グスク	グスク	吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	貝塚前II期	北谷西表原
22	北谷城(ちやたんぐすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	大村城原
25	北谷番所址	近世	北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちぬまたばる)遺物散布地	グスク	吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	大村玉代勢原
29	長老山(ちょうろう やま)遺物散布地	グスク～近世	大村玉代勢原
30	大道原(う ふどう ばる)A遺跡	グスク	北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前V期	北谷大道原
32	後兼久原(く しかにく ばる)遺跡	グスク	桑江後兼久原、字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりいーむかいばる)遺跡	グスク	上勢頭伊礼伊森原
35	後原(く しづる)遺跡	グスク～近世	大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	北谷塩川原
37	稻干原(にんふしづる)遺跡	貝塚後期	北前稻干原
38	横嵩原(よこたけばる)遺跡	グスク	北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前II期～近世	伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
44	小堀原(く むいばる)遺跡	貝塚後期～近世	桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	伊平千原
46	大作原(う ふさく ばる)古墓群	貝塚後期・近世	伊平大作原
47	東表原(あがりう むていばる)遺跡	貝塚前V期	北谷東表原
48	新城下原(あらぐすく しちやばる)第2遺跡	貝塚前I期～近世	北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりう じばる)古墓群	近世	吉原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	北谷大当原
52	高畔原(たかぶしづる)水田跡	近世～戦前	北谷高畔原
53	安仁屋原(あに やばる)遺跡	グスク～近世	北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前III期～貝塚後期	伊平伊礼原
55	蕨森(く らんもー)	近世～戦後	伊平伊礼原
56	平安山又上集落跡	戦前	字浜川
57	下勢頭集落跡	戦前	字下勢頭

註:時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」、貝塚前I～V、貝塚後期の表記は高宮暫定編年。

*番号は分布図と一致

北谷町の遺跡分布図





クマヤー洞穴遺跡
(クマヤーガマ)
発行 北谷町教育委員会
〒: 904-0103 北谷町字桑江226
TEL : (098) 936-3159
印刷 有限会社 アイドマ印刷
〒: 902-0073 沖縄県那覇市字上間244(3F)
TEL : (098) 833-1122